

大杉 千尋

〈イーゼンハイム祭壇画〉《キリスト復活》に関する一考察
—「オランス型」キリストの機能をめぐって—

大杉氏は、グリュネヴァルトの代表作〈イーゼンハイムの祭壇画〉の第二面右翼に描かれた《キリスト復活》のキリストの形態的源泉に関して、従来デューラー以外は等閑視されてきたドイツの伝統の中でも、パノフスキーが「オランス型」と呼んだ両手をあげて聖痕を示すキリストの類型に着目し、そこに含意される「人類を神に執り成す機能」が類似の身振りを見せる本作のキリストにもある、という新しい仮説を提示した。

論証にあたっては、先行研究の批判的検証と、「オランス型」の含意の証明にもっとも力がそがれている。数多い先行研究の中でもキリストの形態に関する主要な議論をまとめあげる能力には優れたものがあり、丁寧に図版を揃えて説得性を高める努力を怠らない点にも好感がもてる。また「オランス型」の類型が有する人類を神に執り成すキリストという意味内容に関しても、聖職者のみならず、ドイツでも幅広く読まれた『人類救済の鑑』を通して平信徒にも広がっていたこと、ドイツの祈祷像の系譜に数多くの作例があることを指摘して、ドイツ美術研究に多くの示唆をもたらす刺激的な貢献をなしている。

問題があるとすれば、それは著者も自覚しているような物語的文脈と祈祷像的機能を合体させる際の齟齬ともいえるものであろう。神性を強調するものとして一旦は退けた、先行研究が述べるイタリア美術やデューラーの「昇天」や「変容」との関係を、人間としての身体に受けた傷を示す本図「復活」のキリストと合体させるにあたって再び参照しているため、一貫性を欠く部分が散見されるのである。

さらに論者は、画家に加えて、注文主や平信徒の病者と想定した観者を、イメージ形成を考察する際に考慮すべき要因だとみなしている。機能を語る場合には欠くことのできない問題なので、それに果敢に取り組む姿勢は評価できる。とはいえ、画家はともかく、修道院長、修道会、『人類救済の鑑』の原本、関係する聖職者の多くがフランスに関係しているとの指摘から、本論の論旨に照らすと逆に謎が深まった感じが否めない。また、平信徒の素朴な治癒願望を想定し、それに基づいて、キリスト教終末論的救済論の文脈ではなく現世利益的な解釈を前面に出している点にはあまり説得力がない。そのため、第一面において「自らと同じ姿で苦しむキリスト」をみた観者が、第二面で救済を約束され、第三面で「具体的な治癒の予感を抱く」という形で言及された祭壇画全体のプログラムも、論証すべき見通しにとどまっているように思われる。

しかしながら、議論の多いこのような大作に従来指摘されてこなかったドイツの図像伝統の側面を見出し、それを祭壇画全体の解釈に組み込もうとした意欲と、そこに払われた努力は高く評価できる。また、実証性という観点からすると解釈可能性の提示にとどまっているとはいえ、資料の少ないグリュネヴァルト研究において、本論のようにある程度の蓋然性を有していると思われる仮説の提示は、今後の研究を活性化させるためにも意義のあることだと思われる。

以上の理由により、大杉千尋氏に『美術史』論文賞を授与し、その功績を称える。